

色葉平仄辭書「色葉集」に就いて

岡田 希雄

私は、かつて、川瀬氏が「伊呂葉字平它」明應十年本、

及び其の別本と目す可きものを紹介せられた「推闡」第三

三年八月刊に因みて、續貂的に同じ色葉分類平仄辭書たる「色

葉文字」一卷を紹介した事がある書誌學昭和十三年十月號 今度また

同類の書を見たから、補遺として紹介する。本は無窮會

神習文庫本であつて、十餘年前にも一度見たことがある

が、今度東京へ行つたに就いて再び見て來たものである。

二

本は布目ある空色表紙で題簽もあるが、何れも書寫當時のものでは無い。大きさは美濃版より少し小さいか、普通の袋綴本だが、用紙は薄手のもの、裏打が施してあるが

素人細工だから綴が多くて見苦しい。用紙三十丁、第一丁表に本文と同筆で「色葉集」と記してあるが、これが元の表紙ではあるまいか。こゝに「井上頼園藏」井上氏」と云ふ長方形と正方形との陽刻朱印が捺してある。第二丁表頁には「馬之毛之事」「弓法字」の二項ありて、其れ々の語彙を挙げ、其の裏頁は茶の異名を記して居るが、斯う云ふものは本文とは無關係に、本文書寫後に書かれたものだらうから、輕視して可い。第三丁表頁より第二十六丁裏頁までが色葉分類平仄辭書の本文であつて卷首内題は無く第一行から本文が書いてある。第二十六丁裏には「色葉集之文字終」と尾題を記し、次ぎに

沙門存益撰

維時天正十二戊子季三月吉日書畢

と、書寫者と書寫年月日とを記して居る、即ち天正十二年三月の寫本であり、正に其の時の本と信ぜられるものである。扒字は何う云ふ意味であるのだらうか。

第二十七丁及び二十八丁表頁は兩音字を記し、二十八丁裏頁から三十丁表頁までは作詩法を記すが、中間の二十

九丁一丁分だけは、地藏點眼、大權、達磨、鳥瑟沙摩、
 跋陀、韋駄天などと記して、其れに關した法語めく
 ものを記し、また日本六十六ヶ國の郡數、鎮守數を書く
 が、此の一丁分は作詩法を記すところに在り乍ら前後と
 無關係であり、文字も此の丁だけは他と異なるやうに見受
 けられる。同じ筆者が書いたとしても、時を異にして書
 いたもので、しかも裏打した時などに綴ち誤られたもの
 だらうと考へられる。が斯う云ふ部分も本書としては別
 段に問題とすべき程の事でも無い。

三

本書の中心たる色葉平仄の部は、一頁十行七段に書いて
 ある。界線は無い。「以之平」「以之伦」「呂之平」「呂之
 他」とあるは、他の同類の書と同じである。他字は他伦
 併用して居る。色葉四十七部の中、ラ行のリ・ル・レ・
 ラの四部は無く、ヲ・オ、エ・エはオ・エの兩部を略し
 てヲ・エに收めて居る。爲部は立てゝは居るが例により
 無意味である。

枚載字數は左の通りである。

以平六〇	他八六	呂平三	他三
波平七六	他八二	仁平二四	他一八
保平五〇	他三四	邊平七	他一〇
登平四七	他六九	知平一三	他八
奴平八	他一五	遠平五九	他九三
和平二二	他一九	加平一三五	他一二四
與平三八	他三五	大平七三	他八四
所平二〇	他二六	津平五六	他一〇四
禰平一二	他一四	奈平五八	他五九
武平三三	他二四	宇平五五	他四九
爲平三	他四	能平二九	他二六
久平四五	他四四	夜平二六	他四二
摩平四四	他五〇	計平一一	他一三
布平二九	他二九	古平五四	他四六
江平一〇	他一二	天平三	他五
安平九二	他八五	左平四七	他四四
幾平三六	他三三	由平一九	他二四
女平一三	他一二	美平三八	他二七
之平四九	他六〇	比平五九	他四七
毛平三〇	他三八	世平一四	他一二
寸平三五	他五四		
平字一五三四字	仄字一六六三字	計三一九七字	

此の總字數を明應本三五三〇字、別本四〇一四字、色葉
 文字五九九五字、新韻集八二四〇字、伊呂波韻四八六二

字に比べると、色葉集は最も字数が少ない。しかし色葉各部の立て方で云ふと、明應本や別本の詳しい事は知らないが、リ・ル・レ・オ・エの五部を立てない點では色葉文字に近く、部名の用字も亦、以・摩・比の文字を使用する點では、やはり色葉文字に近いと云はなければならぬ。

四

川瀬氏がチ部の寫眞を出して居られるにより、色葉文字でも知部を擧げたが、色葉集に於いても知部を擧げると左の通りである。

知之平

街 チマダ カイ	衛 同 タ	阡 同 セン	阪 同 スウ
塵 チリ チン	埃 同 ナイ	兒 同 チコ	茅 同 チカヤ
千 チヨ セン	盟 同 チキリ	親 同 チカシ	隣 同 リン
			免

知之他

巷 チマダ ケツ	陌 同 ハク	父 同 チ	陳 同 チン
血 チ ケツ	脈 同 チヤク	乳 同 ニウ	智 同 チ
棕 チマキ ソウ	軸 同 チク	力 同 チカラ	小 同 チイサシ

契 チキリ
ケイ約 同
ヤク誓 チカイ
セシ邁 チカシ
シ近 同
キン散 同
サン

埃の音ナイは、自分の抄出に誤なしとすると、上の塵と熟合してチンナイと成るからナイと註したものに見える親の音註シはンを書き落したのだ、免には音訓註が無い、脈の音註シヤクはミヤクの誤、軸の註のチの右肩に一點を打つて居るのは濁點である。

さてこれらの文字の種類、數、配列等を他の三本と比較すると、色葉文字との關係は平の數字を除けば、色葉集の文字群の後へ數字を増補したとも云ふ可きが色葉文字であると見られるが、明應本や其の別本とは一致の度が少い。しかして色葉の部立てに於いても色葉集と色葉文字とは似て居る。其の上また色葉集は、尾題が「色葉集之文字終」とあつて、色葉文字と云ふのと似て居る。斯う云ふ點から見ると、色葉集の如きものを増補したのが、色葉文字であるのだらうと推定せうと思ふ。

以上、忽卒の調査の事とて不完全ではあるが、此の書の内容に氣付いたに就いて、簡単に紹介した次第である。